

東光西風

排他的な気持をお互いに抱かないために
急速な移民の受け入れは止めるのが良い

ヨーロッパでムスリムの人口が増え続けており、様々な問題、課題が生じている。日本はその先例をどのように見習っていけば良いのだろうか。

社会保障に

ただ乗りすることへの憤り

現在、世界中、特に先進国と呼ばれる国々でイスラム化が急ピッチで進んでいる。特に2000年代から大量のイスラム教徒を移民として受け入れたヨーロッパは、「ヨーロッパはムスリムに支配されてしまった」と嘆き声が出るほど、国家全体が変質してしまった。そして日本は、約20年おくれで、丁寧にヨーロッパの多くの国がたどった道筋を歩んでいる。

現在、イギリスの人口の6.5%が、

フランスでは10%がムスリムである。そして、イギリスの男児の命名ランキングでは、ムハンマドが連続して1位を取り続けている。そしてロンドンをはじめ、バーミンガム、リーズ、シェフィールド、オックスフォードなどの都市でムスリムが市長になっている。ロンドンやバーミンガムでは、町を歩いていても、アングロサクソン系の人に出会うことが珍しく感じられるほど、ムスリムの人口が増え続けている。そして、イギリスの市町村で選挙が行われる時、英語で話をしない候補者が出て来ていることも話題になっている。自分の票田は英語話者ではない

ので、自分を支持する人に対して自分の民族の言葉を使っているのだ。

ポーランドを除けば、ヨーロッパの状況はどこも似たりよったりの状況である。農場や工場などの単純作業を行う人材を求めて、イスラム圏から大量の移民を受け入れた。しかし彼らの多くは実際に働くことはなく、その国の社会福祉にただ乗りしている。

その上ムスリムは宗教上一夫多妻制を認めているため、一人のムスリム男性が、多くのムスリムの女性と事実婚をし、その女性たちはシングルマザーの手当を受けながらたくさんの子供を産み、ムスリ



アフリカ大陸・モロッコと接するスペイン領の飛び地、セウタ。
8月にモロッコからの不法移民約6万人が押し寄せた。

ム男性に金を渡している、というケースもみられる。彼らは、ヨーロッパの手厚い社会保障を巧みに利用することで、更に豊かになり、更に人口を増やしているのだ。もともとその国に住んでいた国民の税金が、そのようなことに使われていることへの反感も強まっている。

世界中で強引な移民政策に対して悲鳴が上がっており、大多数が移民に反対しているにもかかわらず、世界のどの国でも移民政策の変更が進まない。なぜこのようなことが起きるのか。極左的な思想

や極左団体が、各国の行政や司法の奥深くまで侵入しているからであると思えない。彼らは自国に対する憎しみを抱いており、自分の懐が豊かになり、同時に自国を破壊することになる行為を、喜々としながら行っているのだ。

しかも、左翼的な思想とイスラムの思想は真逆である。男女同権、LGBTQの人々が持つべき権利、成年していない女児を早期の結婚から守ること……これらは左翼思想を持つ人々が共通して持っている意識であるが、ムスリムの人々からすれば唾棄すべき考えである。彼らは、ムスリムを国内に入れることで左翼的な目標の実現から自ら遠ざかっているのだが、そのことについて懸念の声を上げる左翼陣営はほとんどいない。なぜ彼らが自己矛盾した行動を続けるのかは全くの謎である。

多様な文化を残すための政策を行うべき

外国人労働者政策で成功しているのは、ドバイとシンガポールであろう。彼らは外国人労働者の権利を厳しく制限し、自分達の基準を少しでも満たさない

ものはすぐに強制送還する。

そのように厳しい政策を行う覚悟がなければ、軽々に外国人を入れるべきではない。そして、イスラム教は、西側の先進国の文化、法制度にとって相性が悪すぎる。これらの混交は、双方に悪意がなくとも、一方的に西側の先進国が収奪されて終わる結果になる可能性が高い。そして何より恐ろしいのは、西側の先進国がイスラム化してしまう危険すらあることだ。地球上の文化の多様性を保つためにも、西側先進国の急速なムスリムの受け入れは即時中止したほうが良い。

数千年単位で見れば、全ての人種、民族が混交され、将来的には民族はなくなっていく、ということが人類にとって一つの理想であろう。しかし、現在のようにな、急ピッチで移民を受け入れれば、逆に民族意識が目覚め、排他的な気持を互いに抱き合ってしまう。ヨーロッパがその好例だ。異文化同士、異人種同士の混交は、良識を持った者同士で、慎重に行われるべきものであると考える。日本も、外国人の移住には細心の注意を払うべきである。

(増田千代)